

【心理学科心理学専攻（専門：臨床心理学コース）解答例と出題意図】

【共通の出題意図】

問 1

本設問は、受験者の基礎的な心理学専門用語に対する幅広い知識を測ることを目的としている。特に、入学後の講義や実習で円滑な学びを得る為に必要な知識の中から、特定の分野に偏らないように設問を設定している。

問 2

本設問は、特定の心理学のテーマについて深く理解し、それを言語化・文章化する能力があるか測定することを目的としている。特に、入学後の講義や実習において必要なディスカッションスキル、レポート作成スキル、論文作成スキルの素養を評価することに焦点が当てられている。

問 1 解答例

- ① アタッチメント（愛着）
- ② コンピテンシー
- ③ レジリエンス
- ④ 軸索
- ⑤ 刺激般化
- ⑥ 心理教育
- ⑦ 徹底操作
- ⑧ リエゾン精神医学
- ⑨ ディスカリキュリア、dyscalculia
- ⑩ 非機能的思考記録表

問 2 解答例と出題意図

- ① 【解答例】 応用行動分析では、標的行動を客観的に数量化するため、行動の次元に応じた複数の測度が用いられる。第一に頻度（生起数）は、一定時間内に行動が生じた回数を数えるもので、例えば授業中に離席した回数を数える場合が該当する。第二に持続時間は、行動が継続した時間の長さを測る

もので、例えば一回のかんしゃくが何分続いたかを記録する場合である。第三に潜時（反応潜時）は、刺激の提示から行動が開始するまでの時間で、例えば指示を出してから着席するまでの時間が挙げられる。第四に強度（大きさ）は、行動の力や程度を測るもので、声の大きさや握力などが例となる。さらに、観察時間に対して行動が生じていた時間の割合を示す生起率や、間隔記録法によって算出される生起割合も用いられる。これらの測度は標的行動の性質に応じて選択され、介入前後の変化を比較することで、行動変容の効果を客観的に検出することが可能となる。

- ② 【解答例】 Lazarus, R. S.のストレスモデルの特徴や概要が記述されていれば基本的には OK であるが、記述の詳細度によって得点は異なってくる。最低限以下のようなことが記述されていることが望ましい。
- ・ 同じイベントを体験してもそこから受けるストレスの程度（ストレス反応の生じ方等）には個人差がある。
 - ・ Lazarus, R. S.はストレッサーがストレス反応を生じさせる過程に認知的評価が介在（影響）していると考えモデルを提案した。
 - ・ Lazarus, R. S.の認知的評価には一次的評価（ストレッサーそのものに対する評価）と二次的評価（ストレッサーへの対処可能性（コーピング）の評価）の両方が組み込まれている。
 - ・ コーピングとはストレッサーに対処していくために個人が採用する方略のことであり、問題焦点型と情動焦点型の 2 種類が提案されている。
 - ・ コーピングの過程でストレッサーに対する認知的評価は変化することがあり、その結果ストレス反応も変化する可能性がある。

【出題意図】 ストレス（ストレッサー及びそれらが引き起こすストレス反応）の発生機序や対処法（コーピング）のあり方を知っておく上で、Lazarus, R. S.の認知的評価理論やコーピング理論を知っておくことは重要かつ基本事項である。

- ③ 【解答例】 力動的心理療法における転移とは、クライアントが過去の重要な他者（親、養育者、権威者など）との関係で形成された感情や期待を、無意識のうちにセラピストに向けて再現する現象を指す。転移は、クライアントの内的世界や対人関係のパターンが“いまここ”に立ち現れる重要な臨床データとなる。そのため、セラピストは転移を丁寧に観察し、言語化を通してクライアントが自らの感情や関係様式を理解できるよう関わっていく。転移が生じると、セラピストは理想化、依存、不信、怒りなど、さまざまな感情の対象となり得る。これらは治療関係に緊張をもたらす一方で、適切に扱われればクライアントが過去の関係パターンを再体験し、新たな理解と修正的情緒体験を得る契機となる。つまり転移は、治療関係を通してクライアントの内的葛藤を明らかにし、変化を促す中心的な心理状態である。転移とともに逆転移にも同等の意義があることも認識しておくことが重要である。

【出題意図】 実際の心理臨床において、中核の面接理論の一つである力動的心理療法において治療関係を理解し面接を意味あるものとするための重要な概念である「転移」についての理解を問う問題。

- ④ 【出題意図】 交感神経の活性化やコルチゾールの分泌などにより、血圧上昇や免疫抑制などの身体的反応や不安・抑うつなどの心理的反応が生じる点について説明することを求めた。心理的反応にとどまらず、身体的反応とそれらの相互作用についても具体例を挙げながら説明できるかどうかを問う問題である。

- ⑤ 【出題意図】 対人行動面に関して特別支援教育の対象となるのは教育用語においては、自閉症（知的障害を伴わない）と情緒障害であり、医学的には自閉スペクトラム症と選択性緘黙である。こうした状態にある指導生徒は主に通常学級に在籍する。しかし、通級による指導の形態で「特別な場」を活用して支援を受ける場合がある。通常学級での教育課程と特別な場でのその大きな違いは、教科指導以外に「自立活動」が位置づけられている部分である。これは主にソーシャルスキルトレーニング（SST）などが行われることが多い。SST においては、般化の問題が課題になるためそれぞれの場の

連携が必要になる。こうした複数の教育の場を利用している子の場合には、それぞれの場と保護者や本人の気持ちも含めた、その全体をコーディネートもしくは黒子となって「繋げる」役割が重要になる。こうした役割を担う可能性がSCには考えられる。

- ⑥ 【解答例】まずアセスメントでは、来室した生徒の訴えを傾聴し、安心して語れる関係づくりを優先する。そのうえで「教室が怖い」という訴えの背景を多面的に把握する。具体的には、クラスメイトとの不和の実態（からかい・無視・対立等の有無、いじめに該当するか）、不安や恐怖の程度と身体症状、欠席・遅刻など不登校傾向の有無、抑うつや自傷リスク、家庭環境や本人の特性（対人スキル、発達的な偏り）などを情報収集する。緊急性の評価として、いじめや自傷の危険があれば最優先で対応する。対応の視点としては、生徒自身のコーピングや安心感を支えると同時に、環境への働きかけを行う。本人の同意を踏まえつつ担任や学年と連携し、教室での座席・班編成や教員の見守りなど環境調整を図る。必要に応じて保護者と連携し、別室登校等の居場所も確保する。教育相談体制やいじめ防止の枠組みを活用し、チーム学校として組織的に支援することが重要である。

【出題意図】本問は、スクールカウンセリングの現場で頻出する対人関係を背景とした不登校・登校しぶり事例を題材とし、受験者が公認心理師・臨床心理士として求められるアセスメントと支援の基本的視点を備えているかを問うものである。第一に、生徒の訴えを傾聴し信頼関係を築く受容的態度と、主訴の背後にある要因を生物心理社会モデルに沿って多面的に見立てる力を評価する。第二に、いじめや自傷といったリスクを見落とさず緊急性を判断する危機介入の視点を重視している。第三に、本問の核心は、個人内の支援にとどまらず、担任・学年・管理職・保護者・関係機関と連携し、環境調整を含めて「チーム学校」として組織的に対応する視点を持てるかにある。カウンセラーが個室で一对一の面接に終始するのではなく、学校というシステムに働きかけるコンサルテーション機能を理解しているかを確認することをねらいとしている。あわせて、いじめ防止対策推進法等の制度的枠組みへの理解も評価の対象となる。